

論文概要の和文様式

雑誌におけるタイトル:

Association between maternal alcohol consumption during pregnancy and risk of preterm delivery: the Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

母親の妊娠中のアルコール摂取量と早産リスクとの関連: エコチル調査

ユニットセンター(UC)等名: 大阪UC

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: British Journal of Obstetrics and Gynaecology

年: 2019 月: 11 巻: 126 頁: 1448-1454

筆頭著者名: 池原賢代

所属UC名: 大阪UC

目的:

妊娠中の母親のアルコール摂取量と早産リスクとの関連を明らかにする。

方法:

エコチル研究参加者94349人の妊婦を対象として、妊娠初期及び妊娠中後期のアルコール摂取量と早産リスクとの関連を検討した。妊娠初期、妊娠中後期の1週間当たりのエタノール摂取量は飲酒の頻度、酒類、1回あたりの飲酒量を用いて算出し、非飲酒者、1-149g/週、150-299g/週、300g/週以上にカテゴリー化し、ロジスティック解析にて早産のオッズ比を推定した。

結果:

妊娠中後期のアルコール摂取量は早産リスク増加と関連したが、妊娠初期は関連がなかった。妊娠中後期の多量飲酒(エタノール300g/週以上)は、非飲酒者に比べて、約4.5倍リスクが高かった(多変量調整オッズ比=4.52; 95%信頼区間1.68-12.2)。少量飲酒(エタノール1-149g/週)では早産リスクが低下する傾向が見られたが、統計学的に有意な関連はなかった(多変量調整オッズ比=0.78; 95%信頼区間0.60-1.00)。

考察:(研究の限界を含める)

アルコール摂取量と早産リスクとのJ字型の関連は先行研究と一致するものであった。アルコールはプロスタグランジンを増加させ、子宮収縮の促進を介して早産を誘発する可能性がある。また、動物モデルでアルコール摂取量の増加は胎盤の血管内凝固や血流低下を生じさせるという報告がある。また、エコチル調査では早産のリスク因子の一つである妊娠高血圧症候群のリスク増加との関連も報告されている。少量飲酒で早産リスクが低下する傾向があったことについては決定的な生物学的なメカニズムはなく、胎児性アルコール症候群や多様な疾患、発達障害などへの悪影響を考慮して解釈する必要がある。

結論:

妊婦において、妊娠中後期の多量飲酒は早産リスクの増加と関連した。